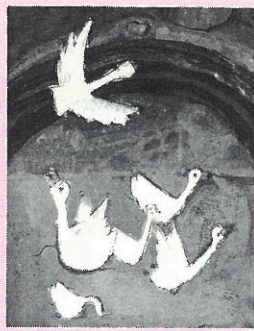
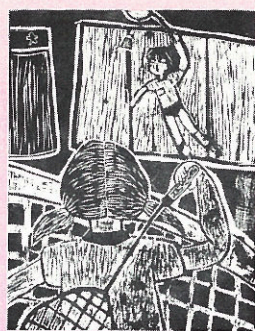




岡嶋 晶子(3年)



中尾紗綾華(4年)



高尾 佳絵(5年)



ふるさとへ

(25)

小林 敦子さん (習志野市在住)



(左はお孫さん)

なつかしいふるさとから…今思うこと

私の生れた所「一円」の地名に興味を持ったのは、確か小学五年生の頃でした。父に尋ねると、「大津郡史」を読まされとても感動した事を思い出します。それから「一円」と言われても恥ずかしくなく誇りさえ覚えました。城山から見下ろす素晴らしい眺めに、当時の偉い方一圓卿が名のない我部落に「一円」と名づけて下さったのですから…。この城山こそ我兄妹が近所の友と過した生活と遊びの全ての場だったのです。春には桜の木の下で花見や、ままごと、山中でのかくれんぼ又わらびとり、母に「だんごが食べた」とせがんで、いぎの葉とりをよくしました。血がにじんだ手の傷の痛さも感じま

せんでした。夏には掛測川の流れる一円橋の下で、川遊びに興じおぼれか、つて通りがかりの人に助けてもらった事、それから泳げるようになった大きな喜び、又川は楽しい事ばかりではありません。大雨大洪水で一円橋が流され通れなく大変だった事、寒い冬冷たい川の水での洗濯や野菜洗いの手伝いは、とてもつらく手に息をハハハかけながら指先で洗った事を懐しく思い出します。我家は農家で四世代同居の大家族でした。農繁期の仕事はそれぞれ役割があり皆大変でした。今の私があるのは、その時小さい姪の世話を母親代わりにし、先生役のまね事ができたからではないかと思えます。

日置俳壇

〈兼題 白酒〉

お白酒祖父の胡座に主役の
児こ 白石 敏江
白酒に話がはずむ三世代
柚花 岩門
白酒や男よろこぶ宴となり
西村亥子代
八十路越え孫の白酒味深し
塩瀬 米江
白酒にひいな顔も赤く見え
国司ハル子
お白酒孫はほんのり桜色
福山スミエ
友来り昔を語るお白酒
木村 一路
白酒や白寿迎えて酔い早し
古谷 桃月

ふるさとを離れ三十五年、結婚し東京から習志野に移り住みました。時代の流れと縁あって独身時代迄と思っていた保母を再度するとは思ってもみませんでした。今年で保育所三十年の節目を迎えました。時代と共に社会が変わり親子の相も変わってきていますが人間として大切な「心」の育ちを思う時、続々ふるさとの豊かな自然の中で、いろ／＼な事を体験できた子ども

軽き音耳元に振る種袋
河内みさほ
ゲートボール球音高し老の春
国司ハル子
ゆるやかな牛の泣き声春の風
塩瀬 米江
受験後集う校区の五六人
白石 敏江
着ぶくれて女忘れし老となる
国司ハル子
永き日を点滴暮しおちつかず
高尾 凡果
卒業を祝いて母の厨事
古谷 桃月
合格の電話は話し声で切る
松岡ヨシ子

〈雑詠〉

筆者紹介

昭和15年生まれ。一円出身。大津高校卒業後、東京に憧れ上京、千葉原習志野市立大久保保育所に勤務。現在同保育所所長として活躍中。